



私達の青年会活動は、いくつかの重要な目標をかかげ、年ごとにその主旨徹底と発展を繰り返しながら今日に至っています。境内の緑化はもとより神職としての教養向上、そして地域青少年の健全育成など、今日の神社活動にはどの一つも欠かすことはできません。これは、神社界に広がってきた活動ですが昨年より神社界以外に対する活動の一つに「献血」をとりあげました。今までの活動と合わせてどのように活動したらよいか今模索中ですが、

# AB!! 献血のこと!! O AB

少くとも社会の一員としての奉仕として一歩外へ目をむけての活動です。

「献血」ということばが古くからありながらなぜ今あらためての活動なのかという御意見もあると思います。しかし、古来より地緑血縁と云うように社会制度の中心を形成してきたこの「血」に対して、私達がどの程度の知識を持ち得ているかと考えた時、あまりにも稀薄ではなかったでしょうか。高度に発達した車社会や医療制度のもとでの生活は、事故の不安がつきま

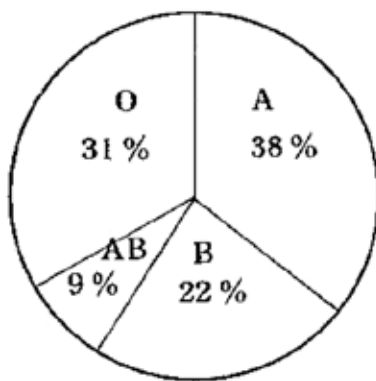
とい、病気などによる健康維持に対する不安に気づいた時、個人ではどうしようもない焦燥におそわれるのではないのでしょうか。

会員の中にはすでに幾度も献血されている方もあるでしょう。そして、他県の中にはすでに街頭に出て献血を呼びかけている同志青年会もあります。若くて健康な今、社会への小さな奉仕として、そして私達の青年会活動がこんな方面にも行われていることにより町の人々との接点ともなり、また自

分自身の健康管理の上にも献血について理解をより深めたいと思います。

この活動の一環としてまず会員名簿に血液型を掲載したことは御承知の通りです。この紙面で紹介するように、年間アメリカより20万ℓもの血液を輸入している「吸血鬼ニッポン」から少しでも早く脱脚して私達の新鮮な血液で必要量をまかなえるように、社会の一員として協力をしていきたいと思

### ☆血液型の分布 (全国)



(地方によりかたよりがある)

### ☆献血の歴史・現状

- S26. 血液銀行がはじめて設立され以後30行できる (すべて売血)
- 39. 品質低下……閣議で献血に切替えることを決定。
- 44. 100%献血 (国民の2.2%……S58. 6.1%献血率世界3位)  
1位スイス 2位フィンランド 3位日本・デンマーク
- 50. 血液の需要増加  
日本 800万人/1億2千万人  
米国 売血  
ソ連 死体血 (脳卒中・心不全) でモスクワの血液の1/10をまかなう。死後24時間政府に死体管理権あり、

### ☆採血状況

日本赤十字血液センター (各県に1~2)

東京都 広尾日赤中央センター  
大森・青砥  
駒込・武蔵境  
八王子・

献血車

採血量	日本	200 ml
	韓国	320 ml
	アメリカ	400 ~
	ヨーロッパ	500 ml

### ☆血液の使用目的

- S.40中頃 外科系 → 現在内科系 (不治の病治療等)
  - 新鮮血 → 採血72時間まで
  - 保存血 → " 3週間まで
  - 血液センターで遠心分離し、余った血漿を分画製剤にする。
  - 分画製剤 (製薬会社で造る) → 最高5年保存使用できるが、圧倒的に不足
- 国内で29.97%の採血がないと自給できない→アメリカから輸入 ex M製薬会社一全米26ヶ所に採血所を持つ  
15,000ℓ/月を凍結して日本へ S56 20万ℓ 年3億円  
血液もアメリカに依存 "吸血鬼ニッポン"

鉄筋コンクリートの庭で生活をする現代の人々、時代と共に薄れゆく自然——発展途上社会姿。しかし、如何なる時代に於いても、朗らかな日光、清々しい風、森茂な樹林、麗しい花、晴々した雲、鳥の声など、これらはこの世の総べての人達に公平な喜び、安らぎを与えてくれるものです。

その核たるものこそ「緑地」でありましよう。複雑化した社会生活の中で、休養を求め、後の活力を生み出す慰めを求められるものがこの「緑地」に他ならないのです。そこで、自ずと生じる発想として、何故緑を多くしなければならぬか、必要性は如何にということになるのです。ただ単に「社会に緑を」「緑化推進」

「緑化推進運動」に思うこと  
境内緑化の意義は如何に

はなく、その目的は、都市化してゆく現社会に於いて益々減びゆく緑に対し、永久不変の緑地というものを如何に時代と共に推進するべきかを考えることこそ、本来の緑化推進運動であろうと再確信するのです。一途に、緑化の為の具体的企画に固着することをせず、都市の緑地とは如何なるべきものかという、一貫した精神を基本に、その働きとしてはその時代に相応する何らかの方法を見出すことこそ、重要な問題であると考えます。

自然の緑は絶えず、天災地変により生長し、そして減び、また生き物であるが故に変化するものです。この自然の力は、人為的には何一つとして手を下さすことはできないのは当然であります。

その大切な緑を守る為に、様々の方法手段、アイデアを過去の人々が苦勞し思索して現在に至っているのです。さてそこで、我が現代日本国の緑化活動及び運動の歴史を紐解いてみると、その都市緑化問題が論ぜられるようになったのは、大正八年（一九一九年）都市計画法が制定されてからでありますが、実際の活動としては、その後起った、大正十二年（一九二三年）の関東大震災による東京の復興計画の内容であるとされています。因に、その内容とは、(1)休養緑地(厚生の役割を持つ緑地)、(2)保安緑地(諸種の災害や非常時に対する緑地)、(3)実用緑地(特に都会地に於ける食糧や燃料の確保について考慮せられるところの緑地)に区分され、

保について考慮せられるところの緑地)に区分され、それぞれに目的をもつて各所に配置せられるようになったというものであります。そこで本論となるわけでありませんが、様々の目的をもつた緑地があるその中で、神社の林苑(境内)は、神の尊厳を護る清浄の地であって、敬仰参拝する人々にとっては、崇高な聖地であり加えて、緑をもたない現代都市に生活する人々を誘い導こうとする地であります。つまり、神社の林苑、即ち宗教緑地の目的とは先に示した休養の為の緑地であることは元より、保安にも実用にもといった広域な「緑」であることが本来の意義であると考えます。この根本的な意義を「緑化推進運動——境内の緑化」という問題の根底におく

べきことを再認識すべきでありましよう。私共、神社界の人間、強いては宗教活動を行なう者にとって緑を守ることこそ、世の人々に対し自然の靈感を享けしめんとする観念と、宗教の教義と形像に敬仰の心を結集して、その道を説く大きな要因となるのではないでしょう。人々にとって、神社の森が、「町のシンボル」或は、「保護樹林の為の森」といった偏見におわるのではなく、当然のことながら公園等の緑とはまったく違う、休養、余暇、保安、実用といった深く意義ある社会に於ける最高の「緑」でなければならぬと考えるのであります。神社に於いては、それぞれその土地柄、事情等によって緑の在り方は様々でありましよう。樹木の枝の張り具合、落葉の状況等は、利己主義の傾向にある現都会人社会では、数多くの問題を生じてくることは致し方無いことではあります。それはそれで手段方法を考え出せば良いのです。例えば、落葉が多くそれ故一つの迷惑を生み出すのであれば、その清掃によって人との会話、コミュニケーションを計り和を講じるのも手段であるし、また、樹木の少ないところであるなら、鉢植えの木や草花等を数多く配置するのも方法でしょう。何れにしても人々が何等かの慰楽を求め、悩苦しを忘れ、空虚を満さんとする心理を生み出させることにより、宗教活動としての働きは元より、一つの社会的な緑地施設的役目をも果たすことになるのです。それは、平和的文化国家建設の為の一翼であり、境内緑地は、精神厚生

活動報告

○第五回懇親ソフトボール大会が七月二十八日、明治神宮外苑軟式野球場で開かれた。七チーム百二十余名の参加で、まづ開会式の後晴天の下松山庁長の始球式で熱戦を開始。優勝は第三地区チーム(大田品川目黒世田谷)でした。

○自衛隊生活体験入隊が、十月十二・十三日の二日間、会長以下十六名の参加で行われた。陸上自衛隊練馬駐屯地の第一輸送隊々員の指導により全員隊服と長靴の配給を受け、敬礼作法や基本教練の後、教官より自衛隊の現況や国防についての講話が行われた。翌日早朝より木銃教練、そして昼食は、各隊ごとに行われている隊員の誕生会と重なり、第一輸送隊全員と同席しての楽しい会食が催された。



活動の主軸といっても過言ではないと思います。私達はその為にも、奮励努力すべきであります。

「緑」を増やすこと——それは一体全体どの様な意味があり、何の必要性があるのか。将来、限られた領土内に於いて、人工増加と都市化への変貌、そして産業文化の発達により次第に滅び行く「緑地」は、火を見るよりも明らかです。かと言って無雑作な緑化推進は、むしろトラブルの原因を生み出すだけに留まるでしょう。今ここでもう一度、心新たに「緑化推進」を、そして国家がそれぞれ考えるべきだと痛感致します。



緑化運動が叫ばれて久しいが、なかなかその実は上がらない。相変わらず無秩序な都市化の波に押されて、森林の伐採が進み、このままでは、砂漠のような状態になってしまう。また、僅かに残された緑も、がんにがらめに管理され、自然の緑とは、とても言いがたいものがある。そんなことから、自然保護を訴える動きが、最近、ようやく市民の間から具体的に起ってきている。都緑の倍增推進会議なるものが、「緑の倍增をめざして」と題する提言を都に對し答申した。それによると、現在の東京は、あの超高層ビルが建ち並ぶニューヨークと比べて、公園面積で八分の一、緑被地率では一％と全く緑を失った状態で、このままいけば、西暦二〇〇〇年までに一ヶ台まで落ちしいくだろうと言っているのである。このように、自然破壊が進む中で、

緑を守る最後の砦は、昔から鎮守の森であり、人々の憩の場として親しまれてきた境内には緑を絶やしてはならない。しかし、この最後の砦も、最近では、都市化の波が押し寄せてきている。まず、隣接している住宅とのトラブルがある。これは、落葉、毛虫、枝による電線の切断、日照、風通し等、さまざまな問題がある。このため、境内を管理している我々も、自然に放置しておくことに消極的になり、必要以上に枝をつめ、背を低くして、草は刈り取ってしまう。少なからず、自然破壊につながっている。さらには、経済的理由から、止むを得ないのだろうが、樹木を伐採し駐車場

にしてしまう例も多  
いように聞く。車  
が出入りすれば、  
当然ほこりが立ち、  
雨の日などは泥濘っ  
しょう。それで、  
アスファルトで地面  
を覆ってしまう。  
これでは、草花の植  
える余地はなく、  
樹木もだんだんと弱  
ってしまふ。昔の森  
のままの自然を取戻  
すことは無理として  
も、自らの手で、も  
うこれ以上の緑の損  
失は防がねばならな  
いであろう。

### 「境内の緑化」について

中野区氷川神社

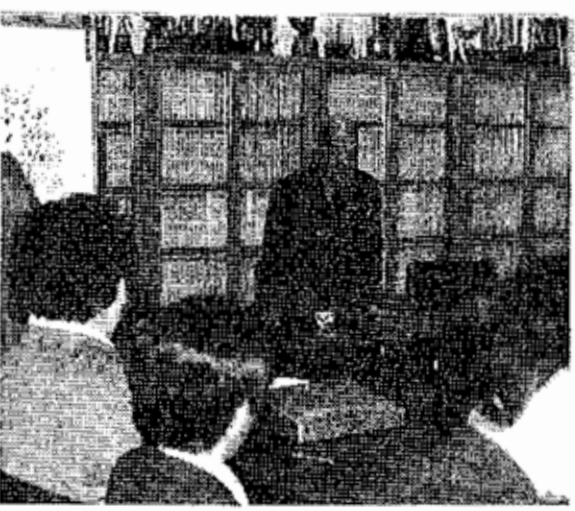
禰宜 小侯 隆

ある小学校では、校庭がアスファルトで覆われているため、草花を植える場所がない。仕方なく、先生も、生徒も、一人一鉢ずつ持ち寄って、窓際にグリーンベルトをつくって、かろうじて、僅かな緑を楽しんでいるようないじらしい姿がある。小さな草花を慈しみ、それを育てていくことによって、生命の尊さ、優しい思いやりの心が芽

生えてくる。こんな教育がなされたならば、少し前までは考えられなかったような、校内暴力、家庭内暴力といった現象も起らないだろうとさえ思われる。人々の心のなごむ、心のよりどころとして、自然を守り育てていかなければならない。そのためには、何としても現状の維持に努め、小さな苗木から大木になるには、何十年という歳月がかかるが、この地道な努力を続け、鎮守の森を復活させなければならぬ。

青年会の活動としてはこんなことができるのではないだろうか。それは木の多い神社では、芽を出した、小さな苗木があると思  
います。その苗木  
を皆で持ち寄って、  
木の少ない神社に  
植えてみるのも一  
つの方法ではないで  
しょうか。また、各  
々、奉仕している神  
社に於ても、例え  
ば、木に名前札をつ  
けて関心を持つて  
もらうとか、近所  
の人達が、自由に  
植えることのでき  
るスペースを提供  
するとか、いろいろ  
考えを巡らして、  
緑の増殖に懸命に  
取り組んでいかな  
ければ、ならない  
と思います。

緑、自然は、祖先からのさびかりものであると同時に、子孫からの預りものであると思います。この緑を、これ以上損なわないように、私たちの責任で、次の世代に引き継いでいきたいものです。



○第二回懇親バーベキューバスが八月十七日に計画され多数の参加申込みをうけたが、生憎台風の影響で秋川溪谷が増水していた為に中止となった。

○忘年会は、十一月二十五日夕、箱根湯本「橋」で行われた。先輩会員三十八名の出席で賑やかな一時を過ぎた。

○神青協創立35周年記念キャンペーン及神青会新年会が一月十三日、神田神社の明神会館で開かれた。神青協の田中会長を交えての討論会の後、木島則夫氏による講演、そして正式参拝が行われた。

○第二回教養講座は、平岩満雄氏を講師に十月二十九日に、第三回は、十一月十九日、中川正光氏を講師に、第四回は、二月二十七日、平岩満雄氏に雑祭の問題点(第二回の続き)について講話がなされた。

現在何々林道とか言う道路を作ったり、ゴルフ場を作ったり、地域開発の名のもとに自然破壊が進む一方、神社の森を見直そうという考え方が高まりつつある様です。特に都会においては緑が減少しつつある現在、一部の区では社寺の森を「保護樹林」に、古木・大木を「保護樹木」に指定し、その保護にやっきになっています。それは鎮守の森が人々の心を潤し、安らぎの場として太古の昔から変わることなく生き続けている事に気が付いたということでしょうか。

### 神社の森

日本各地には数々の神社があり、それぞれの地域において人々に信仰され、生活の至るまゝ 習慣に 係わり 江東区香取神社 を持つ 禰宜 香取邦彦 という 事には 異論はないと思います。その様な神社の信仰が他の宗教と異なる大きな点は、神社というものは社殿だけをとりえて神社とはなりえないと考えます。それは神聖な森や山・大木・岩や人間の力では到底及ばない自然現象は神の働きと考

え、その恵みに感謝し、反面偉大な力におそれおののきそこに神を祀る様になつた。やがてそこに本殿が建てられ、次に拝礼するための拝殿ができ、鳥居・参道などの施設が順々に造られて行つた訳で、これが神社の発生の段階であります。

この様に「モリ」とは単に樹木の生い茂った地域を指していたのではなく、神々の座す特定の地域、神霊のこもる

所を意味していたと言えます。その様に考えると神社はその広い境内と森とを抜きにして「神社」とは言い難い事が理解できると思います。

すでに他の神青会が記念事業の一環として或は継統事業として苗木の無料配布を行なうなど「緑化運動」に力を傾注している。こうした教化活動がいち早く全国の神青会においても推進される事が望ましいが、神社の森はなぜ太古のまま保たれて来たのか、又神社の森はどの様な精神的意味があるのか、を踏まえて展開されなくてはならない。ただ単に緑を植えて行くのであれば、それは植樹にすぎない。そうではなくて、我々青年神職でなくては出来ない緑化運動があると思います。

森こそが宗教機能遂行上の生命的要素である事は前にも述べましたが、その遠い祖先から受け継いできた何よりも貴重なこの緑を、自然のまま私達の子孫に伝える事が、我々神職に課せられた責務であると考えます。

現代人に「緑のあるところは」、と質問して、何人の人間が神社あるいは寺院と答えるであろうか。大部分の人々は、公園と答えるのではないだろうか。コンクリート・ジャングルと呼ばれる都会に、ジャングルと呼ばれながらも緑の少ない都会に現代人のオアシスとして、小さくても息のつける所として神社にもっと緑を増やすことが先決であるといっても過言ではないでしょう。五、六年程前の環境庁の発表し

たものによると、明治神宮の神域にある森林は、厚生林であると発表された。明治神宮造営時に造られた森林も六十年目の今日にして、自然に還つたといえることもできるでしょう。将来、自然に還すことも今の時点で第一歩として手がけるようにしたいと思えます。先日、私の奉職する神社に植樹祭と称し、氏子区域の代表の方々が、ソメイヨシノ三本を植えました。これ

### 境内の緑化

で私の神社にもソメイヨシノ三本、ヤエザクラ四本、シダレザクラ一本となり、他にも白梅十本、紅梅十本、銀杏五本など大小あわせて七、八十本程の樹木が育成しております。戦後の焼けただれにもよる 境内の緑化 板橋区熊野神社 禰宜 中島敬史 たもの 樹木が育つ だ感 心する

ものであります。しかしながら私の神社は都内でも有数の交通量の多い場所であり、柳が二本枯れてしまったのであります。もっと丹精こめて手入れをすれば、三本枯れるものが一本ですむかもしれません。樹木の手入れに精を出すべきだったのです。

又、別の心配ごととして居るのは、隣接している家屋への落葉や、日当り等の問題であります。特に銀杏は秋になると落葉が多く、掃除もさることながら、隣接家屋への落葉で、屋根や雨トイにつまってしまうのです。杉や楠は常緑樹であり、冬になっても日当たりが悪いと苦情を持ち込まれることもあります。その時は、必要だけ切り落

し、あとはいかに緑が大切であり、都会に少ないか説明して納得してもらおうのです。

昨年、神青会の教化部の事業として、榊の苗木を多数植えました。その榊にしてもあと何年か、各神社に配布され、その後も何十年かすれば立派な樹木あるいは祭典用として使えるのであります。

### 図書紹介

#### ◆「神社とみどり」

神社新報ブックス31 神社本庁編 昭和五十八年十二月第一刷発行 発行所・株式会社神社神報社 定価九八〇円

#### ◆「祭の社会学」

松平誠著 講談社現代新書582 昭和五十五年六月第一刷発行 定価三九〇円

昭和五十九年四月一日  
東京都神道青年会  
東京都港区元赤坂二一三  
東京都神社庁内  
電話 四〇四一六五二五(代)